

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	35 / 2014 / 12 - 25 (再編集版)
タイトル	岩崎ミエ先生訪問記 ー 青高女、新制青高のことなど
著者名	編集部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

岩崎ミエ先生訪問記 — 青高女、新制青高のことなど

編集部

プロローグ

「やぶなべ会」の歴史については、これまでさまざまな角度から探ってきましたが、とくに昭和23年の学制改革と、昭和25年4月の旧制県立青森中学を母体とする男子校(旧県立青森高等学校)と旧制県立青森高等女学校を母体とする女子校(旧県立青森女子高等学校)の統合で大きな変革を見せています。これに加えて、昭和20年の青森大空襲による両校の焼失と、その後の流転ともいえる校舎の変遷は筆舌につくしがたい困難を、すべての面に与えています。約70年の年月が積み重ねられてきた今日、薄れ行く記憶をたどりながら、ここに当時を振り返り、将来に向けての貴重な糧とすることは大切なことではないかと思えます。

本号では、別稿として第3代の五十嵐正俊さんが、「5回校舎が変わった3代目」と題して男子校としての貴重な体験談をまとめています。これに対して青高女からのつながりについての記録も残しておきたいと、今回の企画となりました。

ことし2014年4月30日午後、小山内孝(元顧問)、室谷洋司(第10代)、山道忠郎(第14代)の3人が岩崎ミエ先生をお宅に訪ねました。岩崎先生といえば多くのかたがたは、「ニャンコ先生だ!」とすぐお分かりになると思います。薫陶を得た卒業生たちが「ニャンコ通信」を発行し親睦の場としているほど先生は慕われています(23頁参照)。もちろん、先生の青森高校在職は統合年から昭和39年3月の県立青森東高等学校への転任までですので、ずっと若い「やぶなべメンバー」はご存知ないと思います。先生は担当が家庭科でしたので生物部の顧問はなされていません。しかし、「やぶなべ会」の最大の年中行事ともいべき泊りがけでの夏季調査旅行にはよく引率教員として参加されました。「やぶなべ会」を暖かく見守ってくださり、「やぶなべ会報」も毎号お届けし、さまざまなご感想をお寄せくださっています。そして訪問者の3人は素晴らしい含蓄に満ちたお話を聞くこととなります。

やぶなべ会のこと

— 私たち青高の生物部OB会「やぶなべ会」はずいぶん先生のお世話になっています。

岩崎先生 「やぶなべ会」の会報をいつも送っていただいています。生物部で活動し、卒業してからも色々なことが書いていますね。生物部は毎年夏になると、方々に調査活動に行き自然に親しんでいましたね。女子部員もいるでしょう。どうしてもキャンプなど宿泊がつきもの場合は女の教師がついていかなければなりません。青高は女子の教員が少ないでしょう。それで私もいくことになりました。鶯へ行ったときですが、そのとき赤沼にも行きました。入



写真1 岩崎先生(右)と妹の北川キエさん

口が目立たないものですからなかなか大変。(帰りに山から)出てくるのもずいぶん苦労しました。私の青森高校在職は昭和25年から39年まででした。部活動で泊りがけの場合は引率の順番がまわってきます。方々へ行ったと思います。

生物部だけではありません。演劇部の引率は大変でした。小道具をいっぱい持っていきましょう。キャンプの場合は鍋釜だけでいいんですが……。夏休みになると、こういうことで忙しかったですね。でも私は、運動とか歩くのは得意だったと思います。

青高女のこと

——先生は青高女に学ばれていますね。それは戦前のことで、今の学校生活とはずいぶん変わっていたのではないかなと思うんですが。とくに学業から離れた「思い出」もいっぱいあったと思いますが。岩崎先生 青高女(青森県立青森高等女学校)へ進みましたが、通学はここ(今の中央4丁目)から、もうなくなりましたが浦町駅(今の平和公園)のところに、ずっと歩いていきました。今の青森市文化会館のところに学校がありました。

思い出ですが、2、3年生のときはバレーボールをやりました。五所川原高女とは対抗試合をよくやりました。そこには平川清さん(のちの校長、教育長)の奥さんになった千里さん(旧姓・佐々木)がいてよく会いました(卒業後、青高女の先生になった)。新城のスキー場にも行きましたよ。小高い山のでっぺんから、こっちに向けて降りてくると畑です。そこに二つ三つの小屋がありました。スキーに行くときは、みんなリュックに薪を1本ずつ持っていきます。それを焚くんです。行くときは新城駅まで車で行って、それからは歩きです。山の方は高いから帰りはスキーでそのまま駅まで来ました。歩いた距離は記録に6キロとあります。



写真2 新城スキー場。リュックに薪を1本ずつ背負って行きました

校友會遠足部徒歩記録表											
高 師 女 4 年 2 組 4 番 岩 崎 ミ 工											
回	月日	方 面	距 離	證 印	回	月日	方 面	距 離	證 印	踏む大地・漲る力	
	5.10	浄水場方面	15		2.27	幸畑方面	16	347			
5	6.18	練兵場方面	10	25	10.27	久栗坂方面	20	367			
6	6.25	龍澤方面	16	41	7.23	幸畑方面	10	383			
7	7.2	梵珠山方面	24	65	2.19	新城スキー行軍	6	389			
	7.8	玉松養方面	40	105							
8	8.12	下湯方面	30	135							
9	8.28	田代方面	52	187							
10	8.11.2	鎌倉方面	68	255							
11	8.19.18	岩木山方面	36	291							
13	9.10	野辺地方面	40	331							

図1 遠足部徒歩記録表。4年生のときは合計389キロを歩いている。

皆さんが来るというので古い資料を探していたら、「校友会遠足部徒歩記録」というのが見つかりました(図1)。ハンコなども押しています。日曜日など天気のいいときに岩谷(正雄)先生が連れていきました。ガンプですね。郊外のずっと遠いところまでずっと歩くんです。バスなんかないでしょう。(田代の)後藤伍長までも歩きました。大峠とか小峠なども記憶があります。記録には「田代方面」とあって距離は52キロです。これは4年生のときの記録ですが、一番遠いところは「猿倉方面」とあって68キロですね。8月11、12日とありますから1泊だったんですね。玉松台にも行きました。片道で20キロでしょう。往復で40キロもあるんですよ。それで十里歩くんだと言うんです。(年間通して距離の)多い人は3月に表彰されました。私も1回、名前を呼ばれてビックリしたことがあります。

私、「やぶなべ」を見て夏に色々やっていますね。私も女学校時代に梵珠山に2回行ったのを覚えています。あすこはあまり難しくない。それで山道によく穴を掘って先生を落とす。穴をちょっと草などで隠して。女学校の頃のイタズラは生半可でなかったですよ。

小野正文先生の英語の時間のときです。教室のドアのハンドルが壊れていたんです。簡単に取り外しができて、先生が入るときにハンドルを外しておいた。すると入れない。生徒たちは教室の中で騒いでしばらくして、中からドアを開けると先生が入ってくる。授業が終わるころ誰かが、そっとドアのハンドルを抜く。そうすると、今度は先生が出てゆけない。小野先生のあだ名はオンチャと呼んでいました。出てゆけないから先生は窓から出ていく。私たちはそこに、「ここはオンチャが出ていくときの窓」と書いた。これは3年生のときで、先生は若くて来たばかりでした。初めに、「ワのことを東大の法科に入れた親がバカなんだ」と冗談を言った。そういう先生だから、つい私たちもイタズラをしたんですね。1年、2年が真面目に勉強して3年になるとスゴイことをする。

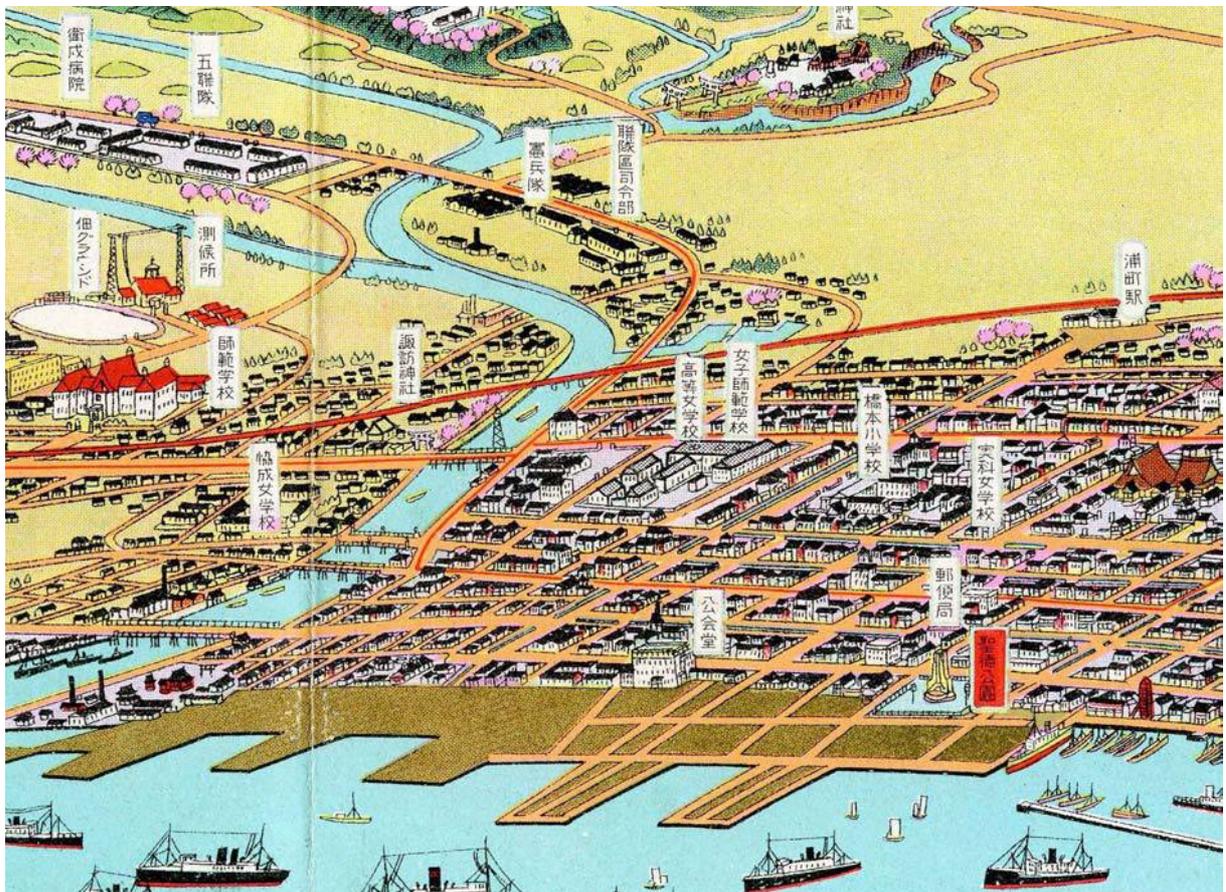


図2 青森市鳥瞰図部分(昭和7年)。中央部分に青高女がある。のちになって新制青高に勤めたときは、上左にある五連隊の兵舎が校舎。岩崎先生の自宅は右端中ほどの旧浦町駅の右手

専門学校進学とその後の志望、札幌高女勤務

——先生は高等女学校とか高等学校で教鞭をとるわけですが、県立の師範学校卒ではそれはできないですね。

岩崎先生 東京女子専門学校に進みました。今の家政大学ですね。県立女子師範学校というのがあって、ここの卒業では教師の資格は今の義務教育の小学校までです。その上となると高等師範学校になり、今のお茶の水女子大学が相当します。専門学校というのはどっちへ行くか決まっていて、家庭科とかになります。

私は東京女子専門学校の家庭科に入りました。家庭科は好きで入ったものではありません。これは父が上の学校に行くなら家庭科だとキツク言われたからです。卒業したら家に帰ってアダコでもしなさいということだったのかも知れませんが、長女でしたから。でも東京にいたときは勉強だけでなく色々なことをやりました。映画もずいぶん観ましたね。

その専門学校ですが、ここには今で言えば国外からも学生が来ていました。満州などですね。ずいぶん金まわりの良いひともいました。それはそうですね。満鉄などに勤めるとか成功したひとがいっぱいたのです。お小遣いも私たちよりもずっと良い。派手ではないけれど豊かさが感じられました。それで自分たちも、向こうへ行きたくなったりしました。ここで青高女でお世話になった小林先生がまた登場してきます。

(卒業後は)父は外地に行くのは絶対ダメだと言いました。小林先生は、戦争になってから北支の方に行っていました。そのとき私は小林先生に手紙を書いたんです。「こっちの学校を終わったら、そっちへ行きたい」と。すると先生も絶対ダメだと言います。私が出した手紙のウラに書いてよこしました。これは、忘れられません。コンコンと書いてよこしました。「ここは、君たちがくるところではない」と。

そして先生は、「君は青森で、北海道が近いからそっちに行きなさい」と言ったのです。とにかく私は青森から離れたかったんでしょうね。北海道では、本州のことを「内地、内地」と言って親近感をもってくれたのです。ずいぶん歓迎されました。札幌市立高等女学校の先生になることになりました。これには父も反対しませんでした。ここは良い学校でした。1学年が6クラスもあって、専攻科もありました。昭和17年9月のことです。20年3月に退職しましたから2年半ほどいたことになります。昭和20年1月に父が亡くなったんです。長女でしたから青森に帰ってきたのだと思います。

家のこと、父のこと、終戦直前のころ

——お住まいは戦前から今もここで、ずっと同じところだそうですね。お父さんはどういうお仕事でしたか。



写真3 昔の家(昭和4年春)。屋根には明治生命保険の看板が



写真4 現在の家。同じ場所にほぼ同じ形で建てた

岩崎先生 父は次男で海軍でした。横須賀に10年いまして外国にはよく行きましたから、そのとき買ってきた当時の絵葉書がいっぱい残されていたので、県立郷土館に寄贈しました。父は10年勤めて青森に帰ってきましたが、家は戦前からずっとここにありました。これが当時の写真です。昭和4年(写真3)と16年に写したもので明治生命の看板が写っていますね。近く子ども達を集めて、制服姿は私で並んで撮ったものです。明治生命の今で言うと青森支部でしょうか。父が青森に帰ってきてから始めた仕事で、住所は青森県東津軽郡筒井村大字浦町字奥野です。すぐそこが青森市との境です。ここから、松原も全部筒井です。筒井がなぜ青森市に入らなかったのか。筒井には五連隊があって、その住民になっています。固定資産税とかいっぱい入ってくるでしょう。国がここを抑えていたのです。

父は厳しく、よく荷物を出してくるようと言われました。浦町駅のところに出て、それから浜町の公会堂の方にあった郵便局まで行きました。父は、やがてここでは仕事にならないと大町3丁目の方に住むことになります。家族全員が大町に行き、この家は貸しました。

それから青高女ですが、落葉松校舎と呼ばれていますが(写真5と6)、隣には県立女子師範学校があつて附属小学校もありました。校長は両方とも同じひとでした。青高女時代のアルバムもありましたが、貸してやったら返ってきませんでした。

妹さんの終戦直前の青高女の話

——先生は昭和17年まで東京にいて、それから札幌の高女に勤めました。20年3月までですね。この間、戦時色も濃くなり、学生生活も今では考えられない悲惨なものだったでしょう。

岩崎先生 札幌は内地とは大分、違っていたと思います。妹(北川キエ)は私と6歳違いで、その頃青高女で学んでいました。本人からよく聞かされていましたが、ここは本人が話した方が良いでしょう。(7月2日に室谷が再訪問してうかがう)

北川キエさん 私が青高女に入ったのは昭和17年です。この頃はまだ勉強、勉強の毎日です。2年生になると勉強のほかに農作業とか開墾がありました。農作業は操作場を荒川の方に渡ったところに元の火葬場がありますね。あの近くに学校の畑や田圃があつたのです。肥え桶を運んで行ったのを覚えています。開墾は幸畑の月見野でした。

3年生になると(昭和19年)、日増しに戦争が激しくなり、勉強はそっちのけ、2時間授業だったような気がします。そして学校工場というか軍需工場、縫製工場のようなものでした。兵隊さんが身につけるシャツとかズボン下を縫製する仕事に明け暮れました。皆んな朝からミシンを踏みながら、各教室では班長と副班長が決められ、皆んなで協力しながら励みました。ミシンは足りないの家庭にあるミシンを供出させたということもあつたようです。

昭和20年の4年生になると学校工場は疎開す

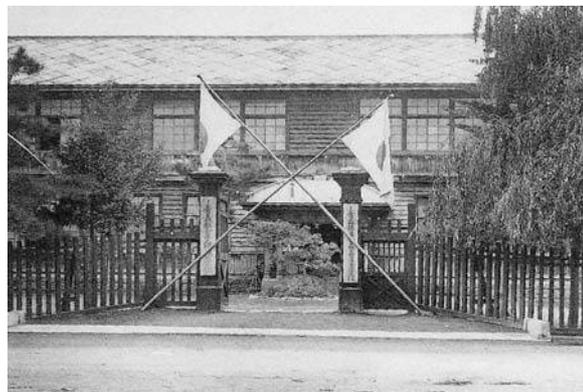


写真5 学んだ落葉松校舎。空襲で全焼

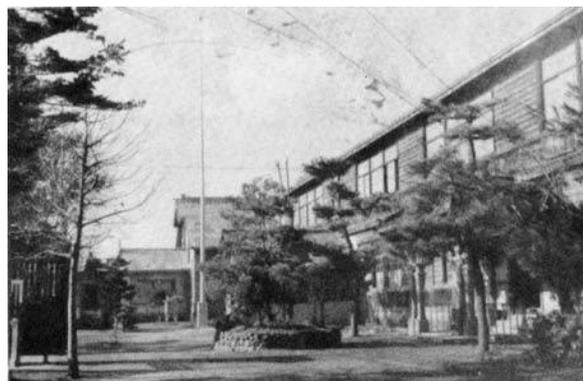


写真6 落葉松校舎。東南方向から見る

ることになります。青高女の疎開先は荒川と宮田・新城小学校で、私は荒川になりました。私たちは、ただ言われるままに疎開しましたが、この辺の事情は大変だったようです。疎開を先導された方は中村勇先生(のちの青森高校校長)で、私たちの青高女36回、37回卒業生記念文集「おもひで」(平成8年発行)に手記を寄せられています。

中村先生は昭和20年3月に千葉県柏市の旧制中学校から転任してきました。東京大空襲の様子を見ていたので、当時青高女で進められていた大きな防空壕建設はまったく無力なことを知っていました。ただ、このような事実は国民に隠されていたようで、県の警察前では焼夷弾を消すためのバケツ・リレーなどが行われていたそうです。先生はこのことを校長や教頭に話して、生徒と工場の疎開の必要性を説きましたが聞き入れられず、いたずらに防空演習が続けられたそうです。



写真7 戦時色が濃くなって、軍事訓練などが

先生は、生徒と教員の命を第一と考え、独断で疎開先を探し、それは黙認されていたそうです。そこで郊外にあった三つの小学校にお願いし、快く引き受けてくれることになったのだそうです。縫製の道具や材料の引越しは大変だったようです。トラックなど輸送手段はない。各村にいた駄賃つけ(荷馬車)に積んで生徒と一緒に無事移動を終えたそうです。

この疎開の一週間後の深夜に青森大空襲があったのです。青高女の校舎は焼け落ちてしまいましたが、生徒の命と物資は助かったのです。焼死した生徒は全校で数名だったそうです。このことを思うと、私たちは中村先生の英断にただただ感謝、今でもジーンとくるのです。

青森大空襲、そのとき……

——大空襲は人によって、場所によってそれぞれの惨状だったと思います。先生は昭和20年の3月に札幌高女をやめていますね。

岩崎先生 そう、札幌から帰ってきてすぐ勤めていないのは、父が亡くなって帰ってきましたが、すぐ勤めることもないでしょう、ということです。保険などもあり家も無傷で当面の生活には問題がありませんでした。月給が月85円でしたが、保険などが入り家もあったので生活には十分でした。そして空襲、負けました。こういうと何ですが、父が亡くなったので私たち家族は空襲でやられても被害は最小で、家も失わず同じところに住むことができたと思っています。

今、思うと人というのは何か突発的なことが起きたとき、自信をもって判断しそれを行動に移すことだと思います。というのは、その空襲のときですが、母と妹は野木に逃げました。リヤカーに荷物を積んで。私と弟はこの家に残りました。弟は国学院を出て商業学校の先生をしていました。東京で焼け出された叔母さんもきて3人で家を守ったのです。周りはずっと田圃です。爆弾が落ちてきました。町はずれですからそんなに落ちませんでしたが、ときどきシューと来る。黄燐の焼夷弾です。それがパーと散る。私たちはそれを消せば良い。ひさしにも落ちる。それも消す。赤い煙が落ちるとそこを消す。前(北側)に「成文」と呼ばれた長屋があって、それは勤め人などが住んでいたアパートのようなものでしたが、そこは燃えてしまいました。皆が逃げてしまって人がいなかったのです。このように私たちは助か

りましたが、(先般あった)韓国の船の事故ではないですが、そこには口で言い表せない、何かの備えというものが働いていたのだと思います。感覚というか直感というか、これまでの経験すべての本能的なものがあるのだと思います。とにかく家が残ったということは助かりました。

青高女の先生に

—— 札幌高女をおやめになって青森に帰ってきてから、大変な混乱のなかに巻き込まれ、そして青高女の先生になるのですが、大空襲などで複雑に絡み合っています。まず年表で整理しておきましょう。

年 表

昭和20年7月28日	青高女「落葉松校舎」全焼 → 造道小学校へ
21年7月	筒井の旧五連隊兵舎へ
22年9月5日	火災で全焼。野脇中・山田高・浪打小学校へ
23年4月1日	学制改革で県立青森女子高校に
4月1日	浪打校舎(ライラック校舎)完成
25年3月10日	創立42周年記念式典

岩崎先生 青高女の先生になるのは昭和21年3月です。もちろん校舎は焼けてありません。造道小学校に間借りしていたので、ここで何か月かを過ごすことになります。(現在地の)ここから下駄をはいて行きました。帰りはもう真っ暗です。堤橋に立って国道に灯りがつくのは、いつになるのだろうと、思ったりしました。それ以外に方法はなかったのです。同僚には、大野まで歩いていくひともしました。

それから間もなく、五連隊に引越します。4月に造道(小学校校舎)に通って、ほどなく引越したことになります。今の青高がある五連隊のウラの田圃には一本道があって、晴雄橋を渡って、道具を運んできました。机とか椅子はどうしたのかちよっと思ひ出せません。向こう(造道)のものは小さいから持ってくるわけにはいかない。なぜか、こっちに来たら大きいのがあったようです。クラスの人数などはどんどん変わりました。(兵舎の)ここの部屋が空いたとか。

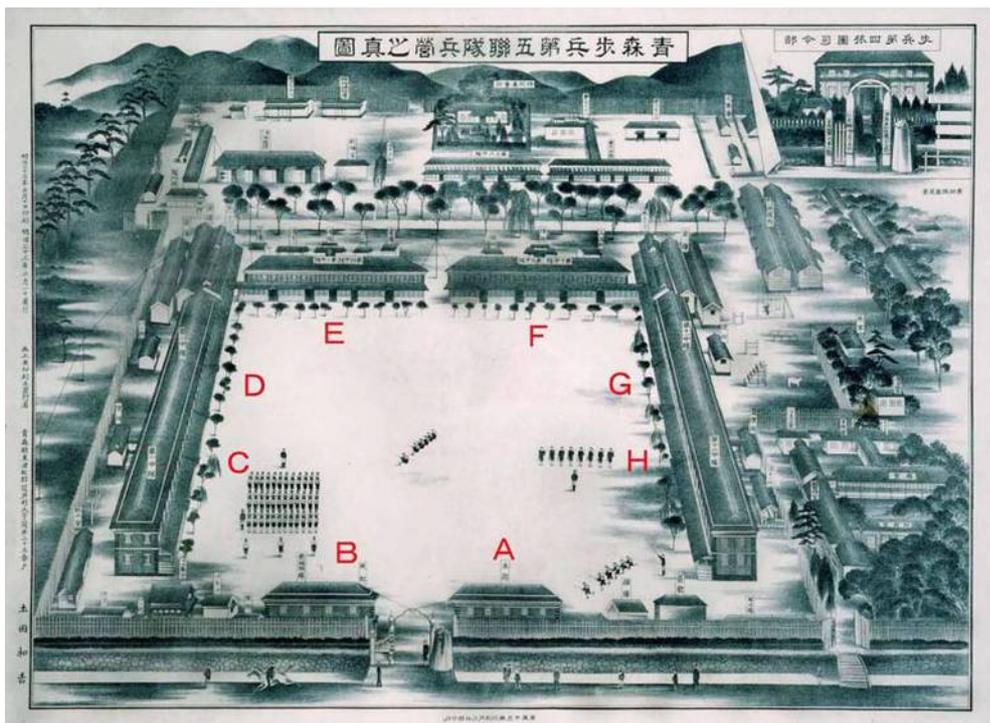


図4
兵営校舎配置図。
青高女はF棟の上
にある建物群を仮
校舎に。後になっ
て統合青高は
C、D棟が校舎と
なる

そうこうしているうちに火事になりました。またバラバラです。野脇中学校に引っ越すとか山田高校に、浪打小学校にも間借りしました。先生がたは教科によってあっちこっち移らなければなりません。—— 焼ける前の兵舎はどのように使いましたか？

岩崎先生 兵舎などたくさんの建物がありましたが、北側の田圃に面したところで、学校として使うところ、職員で家がないとかで住めるように作られました。池がありました。そんなに大きくない池です。そこに面したところは職員室とか校長室にしたと思います(写真8)。教室などは、どこがどうかの記憶はありません。青中とか商業なども兵舎を使って授業をしましたが、青高女の方にはほかから見通せないように塀か何かを造ったように思います。

私が、ここに通ったときは、キャンパスへの入口は南側の正門のほかに、北側の晴雄橋から入る北門、それに西から入る入口があったように記憶しています。私は、正門からまっすぐに入ってきました。青森高校に勤めてからもずっとここ(今の中央4丁目)から通いました。すぐのところに線路があって、その脇を通っていくのです。田のくろを少し広くしたようなもので、そこは歩けばダメと言われていましたが、みんな通っていました。山田高校の生徒たちも通っていて、そこで数学を教えたりしました。

ここには男子とか女子とかが一緒に移ったわけですが、最初は色々目移りすることがあったと思いますが、やがて共学になることになります。そして兵舎に移って間もなく、火事になるのです。川村という先生が焼死するんですが、恐らく先生はここで暮らしていたのではないかと思います。建物はたくさんありましたが、空いているところは職員が住宅用に使っていました。新岡先生、小笠原先生なども入っていました。記憶にあることは、その後になって岩谷先生が夜、川村先生があっちから来たとか言っていました。魂が来たんですね。

もう一つ、池の近くの職員室のところも焼けてしまいました。そこではよくマージャンをやっていたんです。火事のあと、ある先生が、「アレ、マージャンのパイはどうしたべ!」。誰かが大きいマージャンのパイを持ってきていたんです。あの頃、私たちもマージャンはやりましたよ。今でも、私のところには小さいですが、マージャンのパイがあります。私が高校を辞めるとき、私のところにジャッコさんとかフグさんとか来て、送別のマージャンをやってくれたように覚えています。私の付き合いは普通の女の先生とは違って、まったく”タダ”でなかったんです。家庭科だから家庭科らしくすれば良かったんですが、とつくづく思います。



写真8 将校集会所。池に面した建物は職員室・校長室に。前面の池はのちの「三四郎池」

新制青高に統合したころ

—— 青高女は焼け出されて散りじりになったが、やがて商業学校跡地に浪打校舎＝ライラック校舎が新築される。昭和25年4月に男子高の青中と女子高の青高女が統合され、県立青森高等学校となりますね。

岩崎先生 そう、統合してから、兵舎の建物で私たちが使ったのはこれです(図4のC棟)。私は、ここに移りましたが、そのときの生徒が(新制青高の)3回生になります。男女共学でここで授業をしました。

このとき職員室もこの中(C棟)にあったと思います。3回生が1学年のときですね。続いて2年生、3年生が、ここ筒井に来ることになります。新制になったとき、女子は青高女の浪打校舎がありました。そこに2年生、3年生がいたんです。男子の青中の方は、ここ筒井にずっといました。したがって、この時点では2、3年生は実質、同じ校舎ではなかったことになります。

——浪打校舎はどこにあった？

岩崎先生 今の市の体育館がありますね。ここには商業学校があったところで、空襲で焼けたあと、いち早く青高女の校舎が建てられました。ライラック校舎です(写真9)。私は、筒井の方に移ってきて浪打校舎の様子がよく分かりません。高谷睦子さん(2回生、現浪館前田在住)に聞きましょう。(すぐ電話をして、確かめる)

高谷さん 青高女入学(1学年)は、昭和21年4月で造道小学校校舎です。その後、兵舎に一冬通学しました。

2学年(昭和22年)の担任は小田桐先生。9月に兵舎校舎が火事で焼失。このとき1学年は浪打小学校、2学年は野脇中学校、3学年は山田高校で勉強しました。

3学年(昭和23年)になって、浪打校舎(ライラック校舎)に入ります。このとき青高女は42周年を迎えました。二部授業でした。3年生で、このあと筒井に来ました。校舎は兵舎ではなくバラックでした。

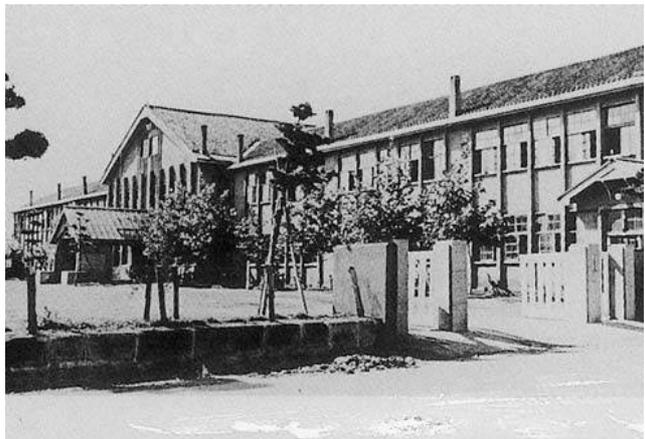


写真9 ライラック校舎。県立女子高校(青高女の後身)の校舎として昭和23年完成、昭和25年まで使用

岩崎先生 そこから新制になったときですが、まず最初に私と、及川、富永、増田先生が筒井に移ってきたのです。2、3年生はあっちにいました。

このとき、新任式というのがありました。今でもハッキリと覚えています。2年、3年の男の子だけを前にあいさつすることになりましたが、これは体育館でやったと思います。今井校長が新しい先生を紹介しますと言って私たちの挨拶になりました。目前は頭も服も真っ黒な塊に見えました。みんな静かにしていました。簡単なあいさつ、名前を言って壇を下りてきました。ホッとしたところに、隣にいた男の先生が小声で「あだ名が付いたかい、僕、ダンブリだけども」と言ったのです。これ、忘れられません。ウーツと見たら、いかにもメガネの(ダンブリらしい)大橋先生がいました。これ!ドツテンしました。

ある日の職員会議のときです。兵舎の職員室です。部屋の中央部には太い柱があつて、真ん中に大きな四角い火鉢を置いて炭火で暖をとるようになっていました。ある男性の先生がその火鉢に両足をかけている。……ビックリでした。

女子教育に徹した人生

——先生は、県内はもちろん東北でも女性として初めて県立高校の校長になりましたね(写真10)。それは、ここから始まったということですね。

岩崎先生 それは、ずっとあとのことになりますが、県立青森高等女学校教諭になって、新制高校となったとき統合で県立青森高等学校教諭、県立青森東高等学校教諭、県教育委員会、県立青森西高等学校教頭、それで昭和56年に県立青森中央高等学校校長になりました。昭和58年に退職して

からは東北女子大学の教授などを務め、平成5年に勲四等瑞寶章を受賞しました。

— 先生は元気そのものですが、その秘訣はどこから？

岩崎先生 わりあい記憶力はあるし、このようにはっきり物事を言います。しかしリュウマチがおきたりして、ご飯は落とす、しゃがんでおれない、立つのが大変。それは昔からだったんです。27歳のときの8月でした。関節が全部はれ上がってしまいました。肩から腰、ひじ、指、それにかかと。靴がはけないのでレインシューズで学校に通ったことがあります。親戚なんかは、まだ若いのにこうなってしまって、と心配してくれました。これは外科ではなくて内科的なものなんですね。渡辺病院に行って、ドイツの薬だといって注射をしてくれました。するとよくなりました。ちょうど青森高校の3回生が1学年のときで、私が担任でした。校長は今井孝先生です。そのとき1年間休んだんです。

とにかく寒いところはダメですね。石造りの建物とかもダメです。あれから東高校ができてそっちへ行っただしょう。建てたばかりの新設校で、当然コンクリートです。家庭科の教室をフローリングにしてくれて助かりました。そのあと、教育委員会にいきますが、あの建物(コンクリート)ですから本当は行きたくなかったんです。

おかしいと思ったら毅然と！

— 私たちが高校で習ったときと同じように、今でも先生の話というか言葉はキリツと引き締まって、キツパリですね。

岩崎先生 「タマゴ事件」というのがありました。そのとき私は生徒指導の担当をしていたんだと思います。昼休みに生徒がタバコを吸っていたんです。校内から外へと、なにかないか見回ります。「さどげん」(佐藤源)の店のところでした。私は店のオガサマに言いました。何で注意して止めさせないの、と。何年何組の誰かと聞きました。すぐ担任を調べましたらチャイナでした。まず生徒の名前を言ったら、チャイナは「あの子はね、今度就職が決まりました」と言ったんです。これは、タバコのことを言ったら大変なことになる。私は「ああそうですか」、それで終わりです。私が一人で見たから良かったんです。二人で回って見ていたら、あのようにはいかなかった。学校の生徒だから、そう言うことが出来るんですね。一般社会であれば、そうはいきません。その後の話があります。「さどげん」のオガサマが卵を持ってきました。「迷惑した。私、しゃべれば良かったのに」。「こんだきや、ちゃんと注意さねばまいねよ!」。

— おかしなことには黙ってられない、ということですね。

岩崎先生 そう、「拝啓、盛岡駅長様」というのもあります。新幹線が盛岡まで開通したときで、そこから青森までは在来線に乗り換えの頃です。東北女子大学に勤めていたとき、東京に用事があって帰るとき、盛岡で乗り換えますね。みんな急いで階段を上り下りです。在来線の入口は全部開いていないんです。そのとき駅員が一人しかいないので入口は一つだけ。すごい混みようです。指定券があったとしてもみんな急いでいるものだから、そこに殺到です。私は入口を全部開放しても問題はないのではないかと、駅員に言いましたが、それはできないと言う。私は、それでは納まらない。早速、駅長に手紙を書きました。駅長は、幹部を集めて、その手紙を読んだそうです。私が不在中に東北女子大学に何度か電話がきたそうです。その後、盛岡から箱菓子をもって謝りにきました。

あるとき角田(実)先生が、盛岡で乗り換えの改札口は全部開いていたよ、と言ったので、「それ、私が言ってやったんだ」と言いました。その頃、8回生の山田日支君が青森駅駐在になっていて、たまたま彼に駅で会ったとき、「先生、きのう盛岡駅がやられたそうですね!」とっていました。



写真10 新聞記事(昭和56年、北海道の新聞)。札幌高女の教え子がアルバムに貼って送ってくれた



写真11 「ニャンコ通信」は、卒業してからも岩崎先生が中心の情報誌。ニャンコ先生H.R.が縁で婚約とか、先生を招いての同期会、先生の近況随想などが満載。2011年6月で46号を数えたが、その後中断気味という

エピローグ

—— 岩崎先生は91歳ですが、記憶力も迫力も完璧そのもの。ただ、リュウマチをわずらっていることから歩くこと、階段の上り下りは大変そうです。私たちが取材にお訪ねしたのは午後2時でしたが、開口一番、「今日は5時にうな重の出前があります。それまで質問に答えて、あとはおしゃべりにしましょう」。後片付けが大変な身なので、これが一番合理的だし、一人だと出前はお店に失礼、五人だとちょうど良い、というのです。私たちは恐縮です、とただ従うのみ!のご馳走になりました。

青高近隣の名物だった、佐藤源が去年解体して整地、つい最近そこに簡易郵便局が新築されたとか、旧教育センターも解体し道路が広がったとか、当時、東北初の公認50メートル・プールは、今は、生徒の自転車置き場になっているとか、話がはずみました。先生は平成12年の百周年記念式典以降は、青高キャンパスには足を運んでいないのだそうです。

小生、近年感じていることを一言、話しました。それは一部の生徒が父兄の車での送り迎えされていること。このことから、青高周辺は朝のラッシュを引き起こして住民は渋い顔をしている、と。温床育ちで、さまざまな学びができない青高になってしまうのは忍びない、と結んだら、先生は深くうなづいていました。

参考文献・資料

- 「1953青高二八会1983 Nostalgia 卒業30周年記念誌」。52p 昭和59年6月1日発行
 「阿遊美 青森県立青森高等女学校卒業五十年記念誌」。86p、平成2年4月30日発行
 (岩崎先生は、昭和11年4月入学、同15年3月卒業、青森高女30回生(あゆみ会)記念誌。表紙の阿遊美は卒業記念アルバムの表題。「歩み」を装飾したのだと聞いたことがあります。岩崎先生の編集後記から。)
- 「おもひで 青森県立青森高等女学校卒業五十周年記念文集」。88p、平成8年9月8日発行、青森県立高等女学校36・37回卒業生記念文集編集委員会
 (北川キエさんは、昭和17年4月入学、同21年3月造道小学校仮校舎で卒業、36回生)
- 「無限の青春 統合第二回生 卒業三十周年記念誌」。333p、昭和57年10月10日、青高二七会発行
 (高谷むつ子さんは、昭和21年4月造道小学校仮校舎で青高女入学、同22年4月新制中学2年編入、同23年新制中学3年、同24年4月新制高校入学1年、昭和27年3月七棟校舎で卒業)
- 「青森市全図、最新版番地入り」。昭和5年、成田書店発行
 「青森市鳥瞰図」。昭和7年、青森市役所発行

(文責 室谷 洋司)

このようなこともあった！ 体験談をお寄せください

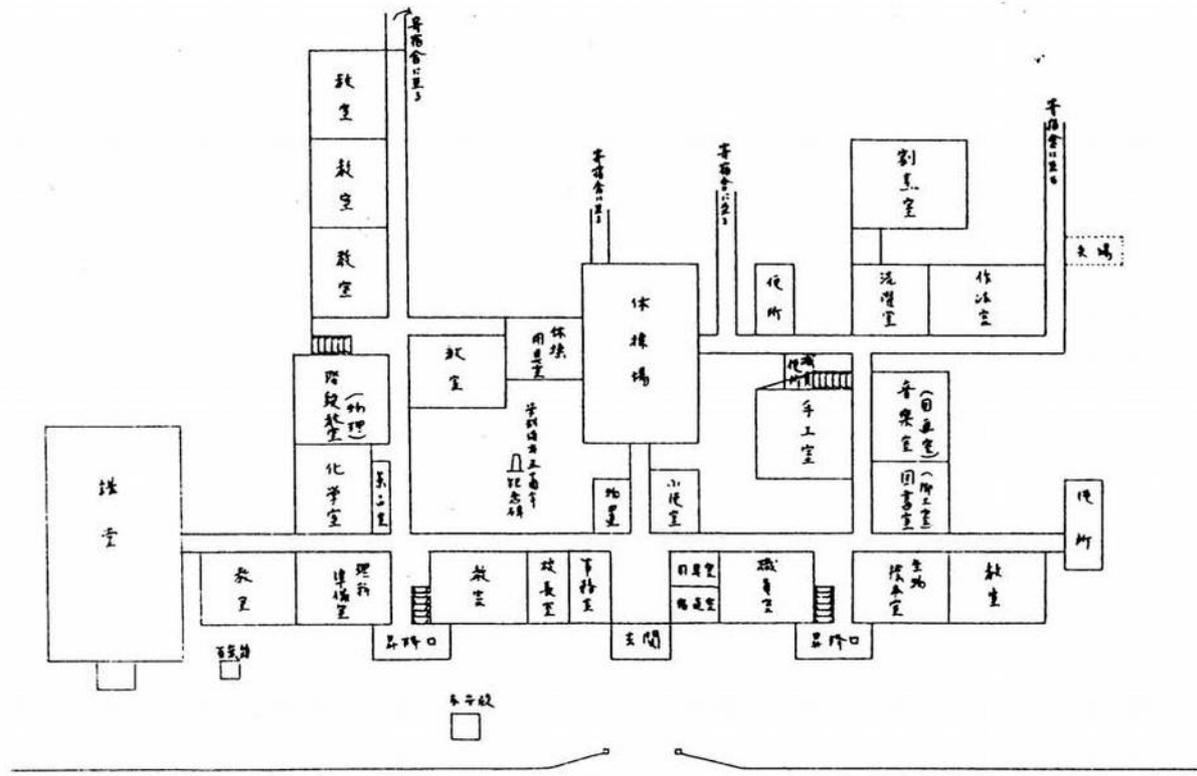
今回は、岩崎先生からさまざまな貴重なお話をうかがいました。この時代、大変なことがいっぱいあったと思います。こういうこと、ああいうこと、などと皆さんの記憶を呼び覚ましながら体験談をお寄せください。

「やぶなべ会報」では、次号から「やぶなべアーカイブ」と題して思い出の写真を発掘、それらを編集してシリーズでお届けする予定です。

青森県立青森高等女学校校舎平面図

(一階)

渡部きみ作成



(二階)

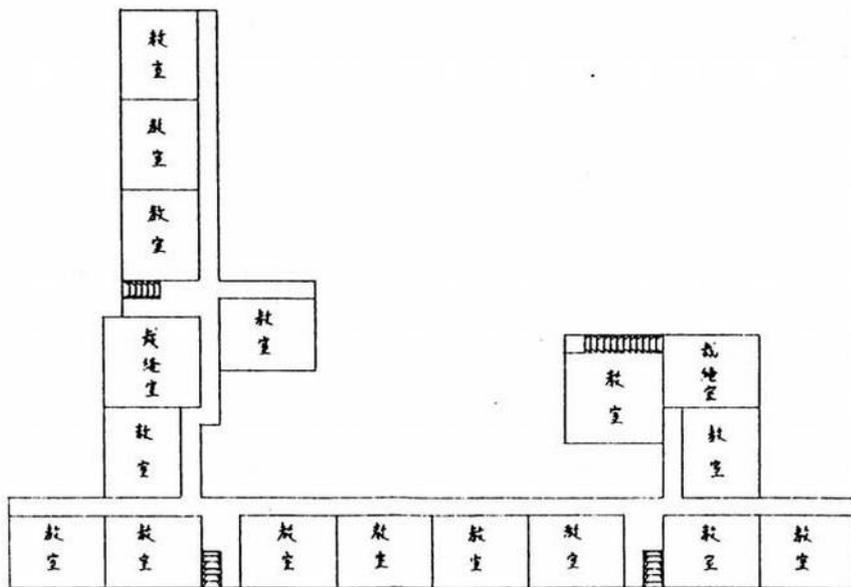


図7 青高女(落葉松校舎)の平面図